

重戦車が行く '09 秋

4 日目：吉見ノ里～鳴尾 55km

5 日目：鳴尾～西明石 45km

最終日：西明石～相生 65km

## <すばらしき日々>

私の、子育て期間中の一番の夢は、大人になった子供たちと酒を酌み交すことだった。父の夢も同じで、私が大人になった時、私と屋台で飲むことだと母や友人に語っていたらしい。無念にも、私が 18 歳の春父は逝き、夢は叶わなかったが、見事に私はその夢を相続してしまったのだ。

よほど私の躰が良かったのだろう。期待通り、二人の子供たちは立派な酒飲みに成長した。普通の親なら憂うべきことなのだろうが、私にとってはこの上ないことだ。

これは優性遺伝だろうか、劣性遺伝だろうか。良い血か、悪い血か。優性で良い血と取ろう。なんたって、子供たちと酒を飲むことほど楽しいことはないのだから。「一郎、おまえだけ楽しんでいいのう。」という声がああ世から聞こえてきそう。「親父の分まで楽しんでやるけえ、安心せえや。」と返すことにする。

現在、その二人は 10km と隔たらない所に住んでいる。道範は伊丹市広畑の陸自駐屯地、扶美華は西宮市甲子園球場の近くだ。関西以東の旅では、必ず扶美華の所へ立ち寄ることにしている。なにせ、私には父から託された使命があるのだ。二人と酒を飲むという務めがネ！

5:19、みさき公園駅にて始発電車に乗り込む。こんなに朝早くから通勤する人がいるのだな、電車は空いてはいなかった。

昨日リターンした吉見ノ里から 4 日目を始めた。ここは泉佐野市で、5km 向うの海の中に関西国際空港がある。臨空タウンの高層ビル群が見えた。いよいよ都会入りだ。

ここから、貝塚市、岸和田市、泉大津市、高石市、堺市、大阪市、尼崎市までずっと臨海工業地帯沿いを走ったのだが、どこもビル、ビル、ビル、人、人、人ばかりでうんざりした。

45km 付近の大阪市弁天町で正午を迎えた。ユニバーサルスタジオの看板が目を引く。ほんの 3km ばかり浜の方へ行くといいらしい。私は行ったことはないが、娘は年間パスを持っていてしょっちゅう行くそうだ。都会は遊び場所には困らない。

ここまでの道中、とりわけ書くことはないのだが、住之江公園を過ぎた所で入った「めし屋」は高かった。一昨日、昨日と同じメニューなのに¥670-だった。和歌山よりも 200 円高い。都会税なのだろうか、店は同じはずなのに。

あと 10km 余りを残すのみとなった。ゆっくり行っても 14:30 には着く。狙い通りにコトが運ぶと気分がいい。

さあ、次の新伝法大橋を渡ると兵庫県入りだ。淀川下流に架かるこの橋は、幅 2m の独立歩道があり、本線は片道 4 車線の国道 43 号線で、阪神電鉄の鉄橋が隣接している巨大な橋の塊である。全部合わせると、幅 50m はあろうか。長さは 2km 程だ。とにかく、今まで渡った内では一番の怪物橋だった。学生時代、阪神電車でこの橋を渡る度に「ここは歩いて渡れるのだろうか。」と思ったものだが、実際渡れることが分かってスッキリした。ところがどっこい、この橋を渡るのはヤワクなかつたのである。

横風が強くて帽子が吹き飛ばされそう。欄干の高さが低くて、下手をしたら落ちてしまう。そんな中を、尼崎や大阪のカアちゃんたちがチャリで突撃してくる。川に弾き飛ばされそうで怖い。200m 置きに設けられている退避スポットまで必死に走ってやり過す、ということは何度も繰り返さなければならなかつた。マジ走りを余儀なくされたのだ。

時々ヒョウ柄パンツのおばちゃんを見かける。ヒョウ柄パンツ？そう、大阪近辺にはいるんです、ヒョウの紋様パンツをはいた元気のいいおばちゃんが。そして、決まって巾着を持っており、その中にあめ玉を入れといて「アメちゃんやろか」と子供たちに配りまくる。そう言えば、芋にも「さん」を付けよつたな。「アメちゃん」やら「おイモさん」やらワケ解りましえーん!!

ひいこらせっせと淀川を渡り終えた。大阪は「川の街」と呼ばれるが、なるほどそうで川や運河が矢鱈と多い。弁天町から武庫川橋を渡るまで 8 つの歩道橋とつき合つた。

この辺りの歩道橋は車道とは分離独立している。川がほとんど天井川なので、歩道橋まで上がっていくのが大変だった。たいがい、10m 程を螺旋階段かジグザグ階段かで昇って下らなければならない。緩いスロープはない。一つの歩道橋を渡るのが大仕事だったのだ。

本日最後の橋、武庫川橋に上がったところで扶美華に電話する。「早！もう着いたん。今から掃除しようと思つたのに。」と慌てていた。14:20、もう 1km もない。策が完璧に功を奏した瞬間だった。

扶美華のアパートに着くや否や近くの銭湯に直行した。旅の疲れを癒すには広い風呂がいい。この秋は風呂に恵まれている。初日、3 日目、そして今日だ。

しかし、都会の銭湯は私をゆっくりと入らせてはくれない。その筋の方々が必ず近づいて来る。背中や脚に刺青を入れた方々がやって来るのだ。そして、「兄さん、いい体格してますねえ。何か格闘技をやってらっしゃるんですかい？」と問う。否定すると、残念そうに「何かやったら強いでしょうに。」と言って引き下がる。

草津(滋賀県)ではエライ目をみた。腕と背中に刺青を入れたにいちちゃんが、「ここにゴツうええ体をした強そうな人がおるで！」と言ひふらすもんだから、脱衣所にいた人たちまでが私を見に来たのだ。いきなり銭湯のスターになつちまつた。

確かに私は走るカタチではない。泳ぐカタチでもない。プールではショーツ型の海パンをはき、トランクス型は絶対にはかない。K 1 の選手にしか見えないからだ。

強そうなのは見かけだけで、私は格闘とは無縁だ。殴り合いのケンカをしたことは、生涯で一度しかない。小学校 5 年生の時、相手は、ご存知の方も多と思うが、あの川野道弘君である。走るのは、10km~250km まで何でも来いで、山岳やトライアスロンもやる。ありさえすれば、毎週どこかの大会に出場するというスーパーランボーだ。若い時は陸自のレ

インジャーに所属していたというから、体の強さは我々の比ではない。

彼は私と同級生の幼馴染みで、小さい頃から心も体も強かった。甘ちゃんの私など相手になる訳がない。強烈なボディブローが偶然決まり、彼が蹲ったのが心配になって、それ以上パンチが出せなくなったのだから、ケンカの素質はゼロだわな。ケンカ中に、「みっちゃん、しよわねえか？」はねえだろう。その後、ボコボコにやられてしまった。情けなー！

話を元に戻そう。この銭湯でも案の定、若者が私をジロジロ見ている。ようやくサウナ室で、「何かなさっているんですか。」と尋ねてきた。ちょっと丸いが太ももはでかい。陸上の投擲の選手かもしれない。私が例の通りに説明すると、「僕は陸上の短距離をやっていたのです。でも、止めてから太りましてね。あなたみたいな体が羨ましいです。どうやったらそんな体になれるのですか。」と訊く。「ゆっくり長く走ることとウエイトトレーニング」と応えてあげた。それから15分ほどサウナ室で談笑し、ビッシリ汗をかいて気分がよくなった。

それではこの旅のハイライト、子供達との晩餐に移ろう。

場所は、阪神甲子園駅の近くの「たじま屋」という焼肉屋だ。元阪神選手の但馬という人が始めた店で、阪神間にチェーン店を何軒か出している。良質の肉を手ごろな料金でサービスするとのことだ。店内には、金本選手や岡田元監督、安藤投手等の写真がズラリと飾ってあった。

予定通り 17:00 に始める。予め扶美華に、「今晚の予算を出せ」と言われて¥20000-ふんだらされたが、こいつに任せておけば足が出ることはまずない。いくら食べたか飲んだか、常に頭に入っているようだ。便利な頭である。こちとら酔いが回ってきたら、つつい気が大きくなって高いものを注文し、ひどい目に会ったことが数えきれないほどあるのに。

私も子供達も内臓系を好む。ホルモン、ミノ、センマイ、ハツ、レバー、ハラミ等をタレではなくて、塩で味付けしたのをレモン汁で食べる。これだとガンガン入る。

刺身はセンマイとレバーだが、牛のレバーは食べる気になれない。'09 春のジャーニーの最終日、宇土市の「渡月」で馬のレバーを食べたからだ。牛のは生臭い。

生ビールをピッチャー3杯と焼酎、日本酒、チューハイ…、たらふく飲んで食って2時間、すばらしい時がアッという間に過ぎた。道範も勘定が気になったのだろう。「足らん時は俺が出すで。昨日給料日やったから。」と言ってくれたが、お釣り¥500-だった。流石!だ。

道範は駐屯地に帰り、扶美華と部屋で2次会といく。コンビニでワインと冷酒を買った。

子供達と杯を重ねる毎に、その成長ぶりが窺える。本音を語り合えるからだ。同時に、自らの老いも悟る。仕方ない。還暦前の今だからこそ解かることだ、と納得させる。

子供たちに望むことはただ一つ、「俺より先に死ぬな」だ。先に逝かれたら、私は酒に溺れるか、酒を止めるかのどちらかを採る。彼らと酒を飲めない余生なんて頭の中にはない。

翌朝は完全に寝過ごす。残り 110km を2日間でカバーすればよいと思い、気が緩んでいたのだ。慌てて支度をし、8:30 に扶美華のアパートを出た。

今日の予定は 65km 先の加古川だが、こんな遅いスタートでは到着は覚束ない。疲労も限界にきており、遠足気分切り替えて懐かしの 43 号線を進んだ。

懐かしと言ったのは、私は学生時代、芦屋市の 43 号線沿いに住んでいたからだ。阪神打出駅付近だった。行政が行きとどいていて、清潔な街だった。パチンコ店、映画館、飲み屋

街等の遊樂施設が全くないのには驚いた。

芦屋といえば高級住宅街をイメージするが、阪神沿線は庶民の町だ。JR線を越え、六甲山の方へ上がっていくにつれてだんだん高級になっていく。特に阪急線より上は、とんでもない「お屋敷」ばかりだ。どんだけお金があるんだい。目ん玉剥いて「スゲー!!」の連発だった。田舎から出てきた無垢な少年の度肝は、芦屋によって容易く抜かれたのだった。

阪神打出駅に立ち寄る。50m程しかない打出商店街の佇まいは昔のままだった。その足で住んでいたアパートに行ったが、古かったので阪神大震災の時に倒壊したのだろう、新しいのが建っていた。忘れもしない若宮町 2-18、昔の思い出に胸を熱くして、しばらくの間眺めていた。

てくてくと 43 号線沿いに行く。大阪と神戸を結ぶこの国道は片道 5 車線で、上を阪神高速道が通っている。自動車教習所の路上練習は、いつもこの国道を使っていた。下手な車線変更でもしようものなら、「おまえ！死にたいんか!!」と教官に怒鳴られ、脚を蹴られたものだ。大震災で阪神高速が押し折れ、ズタズタになったのをテレビで見た時は信じられなかった。悲しかった。あれから何年経つのだろう…。

神戸三宮、元町、兵庫、湊川を経て須磨浦公園へと進んで行く。西宮市夙川～相生市に至る山陽道 100km は 4 年前一度通った。スマイルラン(神奈川県相模原市～別府市 1320km を 14 日間でリレー走破するチャリティーイベント)で道範が走り、私が自転車でサポートしたのだ。彼には、100km は途轍もない距離だったようでかなり泣きが入ったが、なんとか辿り着くことができた。6:00 にスタートし 21:30 のフィニッシュだった。途中何度も交替してやろうかと思ったが、心を鬼にして堪えた。そんなことをしてもヤツが喜ぶ訳がなく、翌日から 3 日間、私も広島県廿日市市まで走らなければならなかったのだ。しかし、10 時間以上も子供が隣で苦しんでいるのを見るのは、親として辛かったな。親バカチャンリンやけんどな。

息子が走った道を再び父親が走っている。嬉しくて涙が出た。子を持つランナーの方々に「どうだ、羨ましいだろう。」と言いたくなるのが本音だ。

36km 地点の舞子公園にやっと着いた。4 年前、妻と扶美華が道範の応援に来て家族 4 人で写真に納まった所だ。頭上には巨大な明石海峡大橋架かっている。よくもまあ、こんなものを渡したものだ。必要だったのか、莫大な費用と犠牲を懸けてまでして…。

明石海峡には、タコフェリー(明石～淡路)の往来が見えた。船体に蛸の絵がかわいい。のどかだ。大橋に負けずに頑張れ！淡路島に渡る時には乗せてくれよ。

右手に明石天文台を遣り過ごす。ほとんど走っていない。時刻は 15:00 前だ。今日は次の西明石で止めた、止めた。45km しか来てないが、遠足としては上出来だ。

16:00 に西明石駅に着き、下り電車に乗って 15 分で加古川駅に到着した。20km 余りをたったの 15 分とは、JR 山陽線はほんとに速い。

今夜の泊りは加古川駅前のホテル「アゼリア」だ。嬉しいことに、ホテル内に洒落た居酒屋がある。風呂と洗濯をサッサと済ませ、「和輝『わき』」に直行した。

金曜日でもあり店内は混み合っていたが、幸いカウンターが 2～3 席空いていて、すかさずご主人が案内してくれた。会釈する顔に温かみを感じられ、言葉使いに心のこもる、これ

ぞ居酒屋の主人といった人だった。もちろんイケメンなのだが、今宵もいい店に当たっちゃったよ。宝くじもこんくらい当たらんかいね。

肴は、明石の蛸を中心に魚介類とした。酒は、生ビール2杯の後、播磨の地酒を試した。利き酒3種、奥播磨安富の「袋しぼり」と「深山《みやま》せい月」、播州赤穂の「凜」だ。全部うまかったが、中でも澄みきった味わいのキリっと辛口、「深山」が気に入った。それを三合いただいた。

店は忙しいはずなのに、ご主人は隙をみては私の前に立って話しかけてくれる。ご自身も毎朝10km程ジョグをされ、私の姿(ジャージ)を見てピンと来たらしい。私の話を聞く度に羨まれ、最後は「究極の道楽ですね。」と締め括った。我が意を得たり!!

最終日は昨日の残り20kmと加古川～相生45km、すなわち65kmをやっつけなくてはならない。加古川駅5:19の上り電車で西明石駅までバックし、5:40に西明石をスタートした。

さあて行くか。昨日はほとんど走っていないので、今日はしっかり走らないとみっともない。姫路までは走るぞ、と言い聞かせた。

一歩、二歩、三歩、アレッ!進むじゃねえか。脚も軽い。6日目だというのにこれは何だ。絶対どこかで止まるはずだ。戦々恐々としながら走った。

けれども、意に反して加古川駅前には8:00前に着いた。人間の体ちゅうもんは解らんもんやね、何処にこんな回復力が残っていたのか。ウソじゃろう。今までの最終日とちやうで。逆に戸惑ってしまう。

適度に小休止を入れながらも、あれよあれよという間に姫路に着いた。時刻は10:30だ。旅は、あと20kmほどで終わる。せっかくだから姫路城を見物していこうかと思ひ城を見ると、遥か1000m向うにそびえている。丘の上だし、土曜日で観光客がワンサカいる。やっぱ止めた。

市街はずれの青山宿付近のコンビニで弁当を買ってゆっくりと食べた。今日は、めし屋にもラーメン屋にもうどん屋にも出くわさない。どこかで時間を潰さないと、とんでもなく早く着いちゃうぜ。未経験のことだ。

心はブレーキをかけているのに、脚が前へ前へと焦る。まるで、旅にケリをつけ早く休ませてくれと言っているようだったので、「ええい、ままよ!」とそのまま進み、14:00に相生に到着した。やっちまった、相生ステーションホテルのチェックインは15:00やで。1時間どうすんねん。仕方なく、駅の待合室で昼寝をすることにした。

15:00過ぎにチェックインし、明日からは必要のないバックパック、ボトルホルダー、靴も洗濯する。コインランドリーが意外と時間がかかり、外に出たのは17:00だった。

目当ては、ホテルに入る前に見つけた「オモニ」という韓国家庭料理を出す店だ。私は韓国料理が一番好きで、何よりも優先させる。期待に胸を膨らませ暖簾をくぐった。

店は韓国出身の母娘がやっていた。まずは、生ビールとキムチを注文する。キムチが抜群に旨い。こんな旨いキムチを食ったことはないぞ。次にホルモン焼きを頼む。ホルモン焼きと言っても、ホルモンとキャベツをコチジャンとニンニクで炒めただけだが、これがまたうまかった。

生ビールを2杯飲みほし、マッコリを頼んだ。10を洗面器のような器に空け、お椀に杓

子で注いでくれる。本物の飲み方だ。真路マッコリのように甘ったるくはなく、スッキリして酸味の強い味わいの本場物だった。

次にビビン麺といく。ビビンパの麺版だ。韓国冷麺に使う麺に具をまぶしてある。もう泣けてきた。うまい、うまいと言って掻きこむものだから、女将さんがビックリしていた。キムチが旨いと何でも美味しい。

と、そこへ3人連れお客が入って来た。私の隣に年配の色黒の人が座った。右手の甲がどす黒い。しきりにゴルフの話をしているから、「ゴルフお上手なんですか。」と尋ねると、「プロです。」という返答。「ハハハッ、失礼しました。恐れ入りました。」だ。レッスンプロなのだろう。手の黒さの訳が分かった。

その人が注文したチャンジャというものをジロジロ見ていると、「一口どうですか。構いませんから、あなたの箸を使って下さい。」と勧めてくれた。遠慮せずに一口頂くと、これがまた何とも言えない珍味で、躊躇せず自分の分も注文した。

チャンジャとは、鱈の胃袋をじっくり塩蔵して薬念(ヤンニョン)に漬け込み、発酵させたものだ。韓国版「うるか」と言ったところだろう。

私が大分県人だと分かったと、「来月宮崎に行くから、何か旨いものを教えて下さい。」と頼まれた。かなりな食通なのだろう。気さくな方だった。

この旅の終わりも最高の店に出会えた。そして、名前が「オモニ」。なんと象徴的なんだ。

2日目はへこたれたが、あとはケガもなく病気にもならず無事だった。

この店との出会いは、「丈夫な体に産んで育ててくれたお母さん感謝するんですよ。」という意味に捉えよう。韓国語の「オモニ」は、日本語では「お母さん」なのだから。